

## 「入門のごあいさつ」

石井米雄

東南アジア史は、これまで大陸部と島嶼部にわけて論じられてきた。1977年に初版のでた講談社版「世界の歴史」でも、1999年に山川から出版された2冊本の「東南アジア史」でも、それぞれに大陸部と島嶼部が割り当てられている。かくいうタイ史を専門にしている筆者もまた、大陸部東南アジア史を学んでいるのだという意識を近年までずっと持ち続けていた。その自分が「海域」の重要性に気づきはじめたのは、ようやく十数年まえ、大学院のゼミでブローデルをテキストに使い始めてからのことである。

大方の「アユタヤ年代記」は、アユタヤ建設の年とされる小暦712年、つまり西暦の1351年における王国の版図の南限をマラッカとしている。しかしその意味の重要性を、詮索もせずこれまで放置していた。いまに至ってこれまでの怠慢を反省することしきりである。怠慢の筆者に冷や水をあびせたのは、『ナーガラクルターガマ』に見えるマジヤパイト王国の勢力下におかれた国名に、新しい解釈を提示したオランダの学者ロブスンの論考だった。ロブソンはその論文のなかで、かつてピジョーが syangka/yodhyapura/ dharmanagari という3個の地名ととらえたものは、じつは syangkayodhyapura/[syangka]dharmanagari というふたつの地名でなないかとする新解釈を提示した。この解釈が正しいとすれば、syangka（おそらくは漢籍の「暹」）が、複数の地名に対応するという新事実をしめすことになる。しかもそのすくなくともひとつは、リゴールでこれはマレー半島東岸に位置する港市にほかならない。とすれば「暹」の主要な中心であったにちがいないアユタヤの関心のひとつが、マレー半島にむけられていたとしても不思議ではない。こう考えてくると、すくなくとも初期タイ史にとって、「島嶼部」は無縁どころが、不可分の歴史空間ということになる。

筆者の当面の関心は、シュリーヴィジャヤ崩壊後の東西海上交易路の覇権をめぐるあらしの当事者のひとつとして「暹」、とりわけアユタヤをどう位置づけるかという問題にむけられている。本棚で長いこと眠っていた『スジャラ・ムラユ』や『ヒカヤット・パタニ』のようなマレー語史料が、ちかごろは光り輝いて見えるようになった。JAMSの会員である専門家の前では内緒にしておきたい話なのだが、1953年、筆者がタイ語の勉強を始める前にかじっていた最初の東南アジアの言語は実は「マレー語」だったのである。その後ほとんど使わなかった報いで、いまではすっかりさび付いてしまったが、最近ようやくウィルキンソンの『マレー語大辞典』や、武富正一著『馬來語大辞典』のほこりがはらわれ、タイ語やカンボジャ語のとなりに並ぶようになった。目下ゆっくりと錆おとしの最中である。

島嶼部との関係でぜひタイ史研究者が注目すべきは、イスラーム化以降のチャム人の動静である。タイ語の古代法典である『三印法典』には、チャム人がタイの水軍の構成員としてかなり重要な役割を果たしていたらしい事実を示唆する記述が見られる。1471年のチャンパ崩壊ののち各地に散ったチャム人のディアスポラの帰趨が、もしかするとアユタヤ史にとって重要な意味をもっているのかもしれない。これもまた大きな課題のひとつである。

東南アジアをその地理的位置だけに着目して「大陸部」と「島嶼部」にわけるといった従来の二分法は、海域世界というあたらしい歴史空間概念を導入することによって、あきらかに修正をせまられつつある。JAMSのお招きをよいことに書かせていただいたこの駄文には、このあたらしい歴史空間の研究が、「大陸部史家」と「島嶼部史家」の共同なくしてはとてできないことをふまえ、どうか一緒に研究させてください、という筆者の願いがこめられている。というわけですので今後共よろしくご指導のほどを。